

# 物理主義の下での重ね描き多元論 (その1 … 幻覚)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-14 キーワード: 作成者: 柴田, 正良, Shibata, Masayoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00065807">http://hdl.handle.net/2297/00065807</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 物理主義の下での重ね描き多元論 (その1・・・幻覚)

柴田正良(金沢大学名誉教授)

Mar. 30, 2022

:JAIST 金沢駅前オフィス

「道徳的行為者のロボットの構築による  
〈道徳の起源と未来〉に関する学際的探究」(基盤研究(A)  
19H00524)

## 目次らしきもの

1. 存在論の語り方 VS 認識論の語り方
2. <美しさ>の場合をちょっとだけ
3. 幻覚の場合の重ね描き
4. 重ね描きにおける実在性

# 存在論の語り方

1. 存在論は、基本的に、それが認めるタイプの存在者や性質や関係に関して、「それが現に在る」ということを、認識論的な正当化なしに語ることが許される。例えば、心的個体(魂)が在り、心的性質(イデア)が在り、しかじかの法則が在る、等々と語る場合。
2. その際、われわれがどのようにしてそうした存在者を把握するようになったのかとか、どのような証拠に基づいてそう主張できるのか、といったことに関しては、答えなくともよい。
3. しかし、存在論の成否は、論理的ー貫性や単純さといった内的特徴に加えて、それが「われわれの経験全体」にどれだけうまく合致しているか、ということによって評価される。現実世界はどのようなタイプの可能世界か、という判定との類似性。

# 認識論の語り方

1. 認識論は、基本的に、どのような経験から知識へと至るか、ということ、いかなる存在論も前提せずに語ることが許される。例えば、感覚や知覚や、推論や判断がどのようにわれわれの知識を生ずるか、といったことを語る場合。
2. その際、認識論は、どのような存在論をわれわれが採用すべきかといったことに関しては、答えなくともよい。われわれの感覚や知覚が含意する限りでの存在は、特定の存在論にまで回収されなくともよい。
3. しかし、認識論の最終的な成否は、「われわれの経験全体」をどれだけうまく説明するか、ということに加えて、有望な存在論とどれほど合致しているか、ということによって評価される。知覚と幻覚の区別がない独我論的観念論と、物理主義との相性の悪さ。

# 存在論と認識論の「重ね合わせ」から

1. 認識論と存在論は、相互に論理的に独立であり、どちらから議論を進めても問題は生じない。両者は、最後に、世界全体の説明と描写において重ね合わされる。
2. 同じ関係は、科学的説明・描写と、素朴な経験的説明・描写(素朴心理学や素朴物理学)においても成立する。ここで、後者は「経験された限りでの現象描写」を意味する。
3. 両者は、相互に独立であるが、ある経験の科学的説明と現象描写として重ね合わされる。
4. 例えば、水槽に突っ込んだ木の棒はわれわれには折れ曲がって「見える」が、物理科学的には「折れ曲がっていない」。ここで、「折れて見える」という現象描写と、「真っ直ぐである」という科学的描写の2つが、観察者を含めた経験の全体的な描写として重ね合わされる。それは、2枚の描写の重ね描きである。

## <美しく見える>と異なる <美しい>という性質

1. これらの絵が<美しさ>という性質をそれ自体として(内在的に)持っているなら、認識者が存在しえない世界でも、「それは美しい」は真である。
2. 他方、それらの持っているのが<美しさ>そのものではなく、<美しく見える>という、認識者依存的な(関係的)性質にすぎないなら、認識者が存在しえない世界では、「それは美しい」も、「それは美しく見える」も偽である。
3. 前者では、絵の物理科学的描写と、<美しい>という知覚(?)描写と<美しく見える>という知覚描写が絵において重ね描きされ、後者では、<美しく見える>という知覚描写のみが重ね描きされる。

その際、<美しい>は絵の客観的な事実報告、<美しく見える>は主観的な印象報告とされる場合もあるだろう。

4. しかし、話はそれだけで終わらない・・・

# ローカルなSVとグローバルなSV (話の続きの一つ)

## 1. ローカルなSV関係

<千円札に見える>という性質は、ある紙切れの色や図柄といった性質にローカルにSVする。

## 2. グローバルなSV関係

<千円札である>という性質は、上の紙切れの性質にローカルにはSVしない。偽札の場合を考えよ。

しかし、<千円札である>も、因果的歴史を含めた、ある範囲の物理的世界にグローバルにSVする。

<本物である>は、造幣局における過去の印刷を含めた時空領域、つまり、その範囲の物理的世界にSVする

# 何が脳へローカルにSVするか？

- 自然現象として脳に発生する心的現象・・・現象的意識、クオリア、感情、美的判断、道徳的判断・・・などは脳にローカルにSVする。
- しかし、判断やクオリアがローカルに脳にSVしても、それが対象とするすべての性質が、存在するわけではない。なぜなら、それらが脳以外のいかなる物理的事物にもSVしないことが可能だから → 反実在論
- 「美しい」という判断がなされても、当の物理的事物が＜美しい＞という性質を持っていないことも可能。つまり、それは＜美しく見える＞にすぎないかもしれない。

# 絵の〈美しさ〉は、絵にSVする？

- 千円札の例を思い出そう。
- 〈千円札に見える〉という性質は、認識者の時空的存在を含めれば、千円札の色や図柄にSVする。〈美しく見える〉という性質も、同様に認識者依存的ではあるが、絵の色や図柄にSVする。
- しかし、〈美しく見える〉という性質と異なり、〈美しさ〉そのものという、認識者依存的でない性質は絵の色や図柄にSVしないだろう。というのも、〈美しさ〉そのものという性質は心的性質でも物理的性質でもないし、物理的性質から因果的に構成される高階の機能的性質でもないからだ。〈美しさ〉そのものを捉えるのに特化した感覚・知覚がない以上、〈美しさ〉そのものという性質は、実は、存在しないのではないか。

# <美しさ>と<美しく見える>

- 経験的にはどうか？
- 実は、<美しく見える>という性質ですら、認識者が異なれば、<千円札に見える>ほどの堅固さすら持たない。人類のすべてのメンバーが、ある絵を「美しく見える」と判断するだろうか？あるいは、そうせねばならないか？
- 例えば、ピカソの「ゲルニカ」は、私個人にはちっとも<美しく見えない>が、<美しく見える>という人もいるだろう。どちらかが誤っている、ということはあるのだろうか？
- 人間どころか、感覚可能範囲を大きく異にする他の知的生物やエイリアンを考えてみよう。彼らの脳に、<美しく見える>という判断が生ずる可能性はさらに低いだろう。

# <美しく見えない>の存在する<美しさ>？

ましてや、<美しさ>そのものが、<美しく見えていない>者たちを含めて、すべての認識者に経験される、ということはないだろう。

- <美しく見える>を経験できない認識者を超越した<美しさ>そのものという性質の存在を、想定する理由が何かあるだろうか？ たとえ、<美一般>ではなく、<この絵固有の美>だとしても。
- そのような存在は論理的に可能だという理由で、そうした可能世界もあるだろうが、現実世界からは遠い。

## 幻覚に関する反実在論

- いま、私の目の前を、小さな虎が空中散歩している。その優美な姿は、どうしたって疑いようがない。私の脳の一部に腫瘍ができたせいだ。
- しかし、「虎が目の前を歩いている」という私の判断がどんなに強固で、視覚クオリアの誠実な報告であっても、そこから虎の実在を導き出すことはできない。
- その〈虎である〉という性質は、見えるその場所にグローバルにさえSVしない。虎の視覚イメージは、私の脳にのみSVする。しかし、また、私の脳の中に、見えたままの虎が物理的に存在しているわけでもない。

## 幻覚における重ね描き

- 虎の幻覚の場合、物理科学的描写は私の脳において腫瘍を描く。しかし、虎が見えている、私のデスクの10センチ上方には、ふつうの空気の描写しか与えない。
- この場合、私の脳を含めた局所的な物理描写全体に、「空中散歩している虎」を含めた私の周囲の知覚(と幻覚)描写全体が重ねられる。
- どちらかの描写が誤っているというわけではなく、どちらも、私の脳腫瘍に関する貴重な情報を与える。
- ただし、幻覚の場合が明確に示すように、物理主義の下では、物理的実在に関して、物理科学描写に優先権がある。しかし、そのことで、知覚(幻覚)描写の、経験された限りでの内容を修正する必要はまったくない。
- 修正されるべきは、物理的実在に関する越権的なコミット。

## 一人称的世界と重ね描き

- 知覚などの現象描写通りに与えられるのは、素朴物理学的に捉えられた物体やその性質を含めて、各経験主体がもつ一人称的世界である。
- 私のそうした記述は、自分の身体物体やテーブルや椅子など、多数の素朴物理学的物体を焦点(留め金)として、他の経験主体の一人称的記述と重ね合わされる。
- その多重の記述世界は、間主観的という意味で三人称的世界ではあっても、なお科学的世界ではない。科学的世界は、物理学を初めとする諸科学のみが初めて与える。その世界を構成するのは、何枚もの科学的描写の重ね描きだ。

# 幻覚の実在性

- 同じような「虎の幻覚」を多くの人が同時に持ったら、それは物理科学的実在性を持つようにならないのか？ 残念ながら、それは素朴物理学的な物体性すら持たない。
- それはあくまで「集団幻覚」であって、それぞれの経験主体の脳にSVしているだけだ。例えば、マトリックスの登場人物たちがもつ、同内容だが数的に異なる、複数の「仮想世界」のように。
- しかし、物理科学的記述を無視して、ある種の「集団幻覚」の実在性を信じ、それに従って行動する(生きる)ことは十分に可能である。
- 幻覚が与える(見かけだけの)実在性が、それにもかかわらず、科学的知識よりも人の行動を激しく駆り立てる、という皮肉と悲劇と、そして希望。
- 宗教や倫理の反実在論・・・それは、「重ね描き多元論(その2)」以降で示されよう。

おしまい

柴田の研究関連webサイト

<http://siva.w3.kanazawa-u.ac.jp/>